

グリーンツーリズム

定年帰農村



農家民宿「寅さんの家」からの眺め

緑の空間計画からグリーンツーリズムへ

農山漁村を訪れ、地域の自然や文化、地元の人々との交流を楽しむ旅を「グリーンツーリズム」と呼ぶ。ヨーロッパでは一般に広く定着している。日本で初めてグリーンツーリズムが研究、紹介されたのは、1972年に政府筋から農林漁業の第三次産業化を提唱する「緑の空間計画」が発表されたのが最初である。当時高度経済成長期も終盤に入り、公害問題が

全国で噴出し、農村部では都市との所得格差等農業問題が深刻化する中で、観光牧場、果実の摘みとり等の取組みが少しずつ見かけられるようになっている。「緑の空間計画」はグリーンツーリズムの先進国である旧西ドイツやフランスが1960年代から農林漁業の第三次産業化に取り組んだ背景や農業と自然保護の関連を詳細に紹介した画期的なものだった。残念なことに、「この発表を受けた当時のマスコミは、農業の若者化か？」と非難した。

それが曲がりなりにも陽の目をみるようになつたのはバブル時のリゾート法であったが、経済対策に主眼が置かれ、当初はスキー客対象の民宿やペンション等が急遽時流のアウトドアや農業体験等を取り入れたものが殆どで、従来型の観光商品と本質的には大きく変わるものでもないものであった。「農業生産及び生活の現場、つまり生き方そのものが創り出す、普通の美しい農村空間でゆったり過ごす」というヨーロッパ諸国の取組みとは異なるものであった。ポストバブルを経て最近では、真に癒される場としての農村空間の意味が少しずつ都市生活者に理解されるようになり、サービス提供者としての農家も様々な模索を行っている。

今回本シリーズでは、ヨーロッパに似た農村景観を持つ北海道から独自の「グリーンツーリズム」の体系を模索しつつ、道内各地域で見られる様々な取組みを6回に分けて紹介する。

農家民宿「寅さんの家」

私が、グリーンツーリズムの受け入れ先のひとつである農家民宿を始めて8年目を迎えるが、そもそも開業のきっかけは、国家公務員として働いていたときに遡る。

1970年代の大規模な未開発地が残る日本最北の地「天北」で酪農開発の仕事に従事しており、



「寅さん」こと筆者(農園前にて)

酪農は当時「トルなき拡大の時代」と言われ、急速な経営規模の拡大が図られていた。

そんな折、親しくしていたある酪農家が、今年息子が小学校へ入学するのだが、2番と成績が下がない優秀な子なんだと自嘲気味に話すのを聞いた。それは規模拡大過程で離農する農家が多く、隣近所に遊ぶ子供もいず、小学校へ入学するのが我が子1人、そんな所でいつまで酪農を続けられるかという問いかけでもあった。その時、私の頭に飛び込んできたのが、先に紹介した「緑の空間計画」である。

規模拡大過程で農家数が減ることはやむを得ないが、農林漁業の第三次産業化で農村人口を維持し、併せて国民の保養、レクリエーション、教育、環境維持の場としても農村を利用していくという考えに大きく共感し、解決策はこれだと思った。

しかし、食糧基地北海道を標榜する政策の前では見向きもされず、リゾートブーム下の取組みもまた理念等を全く欠くものであった。1988年、43歳の時、こつた現状に危機感を抱いた私は、郷里の首長として農林漁業の第三次産業化政策を推進すべく公務員の仕事を辞した。残念ながら勝利の女神は微笑まなかつたが、極僅かの票差から私の考えが少なからず支持されていると感じた。

その後、ヨーロッパの農村を1ヵ月程回り、この種の調査研究を進めながら、その実践として平成6年末より農家民宿「寅さんの家」を郷里蘭越町に入



ヨーロッパのグリーンツーリズムの舞台（独バイエルン州）



年間70～80泊もする東京のおばあちゃん（左から2人目）

タートさせた。当初は4室8ベッドの規模であったが、現在は12室20ベッドまで拡大。東京や札幌等から来る人やビジネス客を含めて年間3,500人程の利用客を数えるまでになった。

客単価は1泊2～3食で平均5,000円、体験は乗馬から農業体験等一通りのことはできるようにしているが、十分なこともできないので無料としている。また宿に併設したキャンプ場もあり、家族連れの方には低料金で楽しんでもらえるよう工夫している。しかし、観光客の90%以上が1泊2泊のお客様で、これを夫婦とパートで慌しくこなしているのが現状である。

日本型グリーンツーリズムの展開

宿泊客の中に、4年前から年間70～80泊もする東京のおばあちゃんがいる。80歳に近いそのおばあちゃんは、今年も妹さんを連れ、既に3カ月目の滞在に入っている。夏休みになるとその家族や関係者らが訪れ、多い年には延べ300泊近くにもなることがある。

おいしい空気と美しい農村風景、数々の温泉、新鮮な農作物、そして放し飼いに近い自然な状態で暮らす犬やワトリなどの動物を眺め、時には軽い畑仕事をこなしながら毎日を過ごす。肺動脈瘤という大変な爆弾を抱えながら、その滞在を家族も認めている。それは我が家と親戚以上の関係が築かれているからでもある。いまではおばあちゃんとの再会を楽しみに毎年訪れるお客さんも少なくない。

一方、最近では定年退職後にあるいは人生の途中に、さらには学校卒業後に田舎暮らしや農業をしたいという方も数多く訪れるようになった。彼らも多くは食や農、さらにはライフスタイルを見直したいという願望を持っている。しかし、現実に移住するのは容易なことではない。ならばそつした定年退

職者や長期滞在者、さらには新規就農希望者を農業・農村が積極的に受け入れる、定年帰農村のような日本型グリーンツーリズムのシステムを作りあげたらどうかと思っている。

新規就農についても、専業農家を目指すのではなく、定年帰農村でのホビータン農業の主たる担い手であり、自然農業のまとめ役、さらには農作業を通じて介護にも従事することを考えている。

農村にお年寄りが定住、または長期滞在すれば、必ずその子供や孫らが数多く訪れる。しかし、彼らが滞在するスペースを住居に併設すると建築費も維持費もかかるので、「寅さんの家」のような既存の民宿や新設の民宿村を利用するつもり。

これからの時代は、地球に負担をかけないという生き方や、夜ぐすりや眠られるという生活もとても大事となる。人によってはそつした暮らしを、世捨人の生活ともいうが、しかし決してそつたではない。

山口県の東和町は人口約5,700人の島の町であるが、住民の半数が65歳以上の超高齢社会である。しかし、ここで暮らす人は一本釣り漁業やみかん農業に従事し、生涯を現役で暮らす。だから長生きで高齢化率が高い割に医療費は安い。寝たきり老人やボケ老人の割合に至っては全国の4分の1の水準である。生活月々33,000円程度の老齢年金だけで暮らす人も少なくない。夏休みやお正月にもなると、島が車の重みで沈むと言われるほど子供や孫らが大学して



帰省する。島が保養や自然教育の場ともなり、こつした自然の中での生き方が社会の秩序やモラルを生み出しているようにも思える。農山漁村の場はそつした生活を可能にするのである。

日本型グリーンツーリズム、それは日本の新しい国土空間、生き方の創出の場でもある。

佐々木農村研究所主宰

農家民宿「寅さんの家」経営 佐々木 寅雄

農家民宿 寅さんの家 ホームページ

<http://homepages3.nifty.com/tora/>

